

年 頭 の 辞



消防庁長官

岡本 保

平成二一年の新春を迎えるに当たり、全国の消防関係者の皆様に謹んで年頭のごあいさつを申し上げます。皆様方には、昼夜を問わず消防防災活動に御尽力いただいております、心から敬意を表し、深く感謝申し上げます。我が国の消防は、自治体消防と

して発足以来六〇年が経過し、ひとつの区切りを迎えました。この間、制度、体制、技術等各般にわたり着実な発展を遂げ、国民の安心・安全の確保に大きな役割を果たしてまいりました。

しかし、社会経済情勢の変化とこれに伴う地域社会の変化により、災害の態様も複雑多様化し、消防防災行政を取り巻く状況は大きく変化してきております。新型インフルエンザなどの新しい感染症の発生の危機、個室ビデオ店などの新しい使用形態を一因とする火災被害の発生など、これまででは考えられなかった危機や災害の発生に備えなければなりません。また、東海地震、東南海・南海地震、首

都直下地震等の切迫性が指摘されており、さらに日本各地に活断層の存在が確認され、全国どこでも大規模地震が発生する可能性を有しています。加えて消防ホースの検定に対する、信頼を揺るがす事案も発覚しました。

これら新たな危機や大規模災害の発生にも揺るぐことのない社会を構築し、国民の安心・安全を維持向上させていくためには、行政がその役割を十全に果たさねばならないことはもちろん、住民と一体となって地域の総合的な防災力の強化を図り、全国的、広域的な見地から消防防災・危機管理体制を充実していく必要があります。

の新戦力として被雇用者や学生の入団促進への働きかけなど、地域の防災力の要となる消防団の充実強化を図るとともに、自主防災組織など、地域の様々な団体との連携を推進することにより、地域における総合的な防災力の強化に取り組んでまいります。

また、大規模な災害の発生時に、迅速な応援活動を可能とするための資器材の整備、消防の広域化実現に向けた取組など、危機管理体制の充実を図るための方策や、検定制度の信頼の確保についても取り組んでまいります。

皆様方におかれましては、我が国の消防の更なる発展と、国民が安心して暮らせる安全な地域づくりのために、より一層の御支援と御協力をいただきますようお願い申し上げます。

皆様方のますますの御健勝と御発展を祈念いたしまして、年頭のごあいさつとさせていただきます。

新春のご挨拶



財団法人 日本消防協会

会長 片山虎之助

平成二一年の輝かしい新春を迎え、謹んで年頭のご挨拶を申し上げます。

全国の消防団員、消防職員の皆様が、常日頃、地域の安心・安全を守るため、日夜献身的なご尽力をされていることに対し、心から敬意を表し、

深く感謝申し上げます。さて、自治体消防制度は昨年六十周年を迎えました。この間、先人のご努力の積み重ねにより、我が国の消防は着実な発展を遂げ、今や地域住民に最も身近な防災機関として、国民から多大の信頼と期待を寄せられております。

しかし、今日、災害や事故は複雑多様化の傾向を強めており、住宅火災による焼死者が未だ多数にのぼるほか、台風、集中豪雨による風水害が後を絶たず、特に昨年は、ミャンマー連邦のサイクロン災害、中国四川省の大地震、国内でも岩手・宮城内陸地震など大きな災害が相次いで発生しました。さらなる大規模地

震の発生も懸念される中、国民保護法に基づく対応など、消防の責務は、益々大きなものになっております。とりわけ消防団は、地域防災の中核であります。これからの防災体制の強化のためには、常備消防の充実ほもとより、消防団が要となって、婦人(女性)防火クラブ、企業、各種団体、さらには自主防災組織などを含む一般住民の皆さんによる総合的な地域防災力を充実させる必要があります。しかしながら依然として消防団員の減少傾向が続くなど、憂慮すべき状況にあります。

そのため日本消防協会にでは、総務省消防庁、全国の消防団とともに団員の増員確保に努力を重ねており、特に昨年は、世界初の消防団国際会議、東京ビッグサイトでの初めての全国消防操法大会、地域総合防災力展開催などで消防団のPRに努めました。最近では対前年比減少幅が少なくなりつつあるとともに県単位、消防団単位では増加しているところもみられますが、ひきつづき、関係機関、団体との協力連携のもと、全力を傾けてまいりたいと考えております。

このような中、消防活動には一層の充実強化が期待されていることから、日本消防協会では、消防ポンプのほか救助資機材等を組み込んだ消防団多機能型車両を平成十九年度と平成二〇年度の二年間でモデル的に全都道府県に一台ずつ交付いたしました。これらのさまざまな活動を通じて、日本消防の更なる発展のため、本年も最善の努力をいたします。関係者のご支援ご協力をお願いする次第であります。

最後に、全国の消防関係の皆様がますますご健で、地域の安心安全と郷土の発展のため、一層のご活躍をいただきますよう衷心よりお祈りして年頭のごあいさつといたします。

地 区 通 信

「新生!丹波市女性消防分団 ファイアー・メープル誕生」

丹波市支部

これまでの丹波市での女性消防分団は、旧水上町において発足し平成十六年十一月の六町合併により、水上支団の分団の一つとして、活動してまいりましたが、平成二〇年十二月一〇日から本団向けの女性消防分団として、活動範囲を丹波市内全域に広げ、また団員も公募により市内在住、在勤者を募ったところ、定員十五名に対し十四名の応募があり、一名少ない状況ではあります。新たな体制で発足する運びとなりました。

また、今までの愛称の「ファイアー・アザリア」も旧水上町の花である「やまつつじ」の英名であったため、市内全域での活動を行うことから、丹波市の木である「もみじ」を英名に変えて「ファイアー・メープル」と愛称も一新しました。発足後、十二月十四日には、女性消防分団任命辞令交付式及び、丹波市消防団新入団員訓練に参加し講義、訓練礼式を行いました。今後の活動として、地域の防火指導・広報活動・応急



ファイアー・メープル誕生



訓練礼式

北から南から

美しい自然と湯の香ただよ

歴史的温泉まち

豊岡市城崎消防団

豊岡市城崎消防団の管轄する城崎地域は、人口約四、〇〇〇人、面積約四〇km²という小さなエリアながら、年間一〇〇万人の観光客が訪れる「城崎温泉」を有しているため、夜間には宿泊のお客様を含めると人口は昼間の倍の約八、〇〇〇人となる特殊性があります。

この城崎温泉は、温泉街がJR城崎温泉駅に隣接しているため交通利便性が高く、自然豊かな山陰海岸国立公園の区域に位置しているため、美しい自然景観を楽しむことができます。ま

た食材も豊富で、但馬牛の産地も近く、日本海を間近に控え、山海の幸に恵まれており、四季を通じて多くのお客様をお迎えしております。

城崎温泉の町並みは、四囲の緑に包まれ、その中大路川の流れに沿って桜・しだれ柳の並木と、玄武岩を重ねあわせた護岸に階段状の大鼓橋が四季折々の演出をし、静かな佇まいを見せています。

「高瀬川のような浅い流れが町の真中を貫いている。その両側に細い千本格子のはまった二

階、三階の湯宿が軒を並べ眺めは寧ろ曲輪の趣に近かった。」(暗夜行路より) これは大正初め頃の大路川界隈の様子ですが、木造の旅館は今も残り、当時の風情がなお息づいています。

「ゆかたの似合うまち」城崎では、夕刻ともなるとゆかた掛けで温泉街をそぞろ歩くお客様が町並みに溶け込み、詩情豊かな古きよき時代の日本の温泉情緒をかもし出しています。また、三〇〇年近く続く城崎の

伝統的工芸品「麦わら細工」は、兵庫県の伝統的工芸品に指定されており、その昔シーボルトがコレクションとして自国に持ち帰ったものがオランダのライデン博物館などに保管されています。

まちの中西部には標高約五六メートルの来日岳がそびえています。山頂からの眺めは絶景で、ことに晩秋には円山川の川霧に包まれる早朝、足元一面を白一色に閉じ込める霧の海「雲海」が日本海へ流れる様子を見ることが出来ます。

二〇〇八年七月には、木屋町通りと四所神社を結ぶ小路に「木屋町小路」がオープンし、新たなスポットが誕生しました。

そのような中、安全・安心な地域づくりを推進するため、予防消防活動をはじめ、災害時の防衛活動、避難・救助活動等ももとより、国民保護法の施行により緊急時の避難誘導など消防団の任務は増加しております。

「自分たちのまちは自分たちで守る」という心意気を発信し、地域の理解と協力を得ながら今後も精進してまいりますので、関係者の皆様には今後ともご支援、ご協力をお願いいたします。



城崎温泉の柳並木

消防団員三年目の自覚

たつの市消防団龍野第一〇分団

水口信太郎



社会人になってすぐ、職場でもよく顔を合わすことが多い、昔からよく知っていた近所のおっちゃんから、「消防団はいってよ!」いやいやや社会人になってすぐですし、まだ仕事に慣れないもので、「。」と押し問答を繰り返して五年が経った。最近もう言われなくなったな?もういいのかな?と思っていた矢先に、同じ職場の、これまた昔からよく知っていた近所のおっちゃんから、「わし、もう

引退するさかいに、消防入ってよ!」と言われ、すでに社会人になって5年経ち、仕事にも慣れきっていた私に、以前の逃げ文句はすでに使えず、「...はい(汗)」と言ってから一年半。まさか、自分が消防団にのめり込んでいるなんて想像もしなかった。

行方不明者の捜索、全国的にも珍しい揖保川の豊堤での水防訓練、年末警戒、出初式と、消防団員として活動していくうちに、だんだんと消防団の存在意義や地域での役割を肌で感じ取り、自分が入団する前に思っていたイメージは払拭されるようになった。そして、消防操法大会へ選手として出場することになった。

われら若手消防団員

(15)

地域防災の要として

伊丹市消防団大鹿分団

坂上 弘明



私は、伊丹市消防団大鹿分団で団員として活動しており、今年四月で入団して二年になります。

私が入団したきっかけというのは、私の父親も同じ伊丹市の消防団で活動しており、子どもの頃から、地域防災の担い手として、地域とのつながりを大切にしながら日々活動する父親の姿を見て、また、消防団の長い

入ったからには誰もが通ってきた道ということで、はじめは「まあ、やらなしゃあないか?」という気持ちでいたが、選手となった先輩団員の方々は、「くやしい」とか「タイムで負けた」とか「リベンジ」とか言っていて、同期入団の年上の方(指揮者)は、「ようは勝つたらえーんやろ?どうせやるなら勝とう!」と気合充分。私(2番員)はこの人たちの中で、「渋々選手になりましたなんて言えないよな...。」と、いかにこれからの何ヶ月かをやり過ごそうかと思案していた。(すみません選手の皆様方)

何もわからない私に、先輩方は手取り足取り丁寧に教えていただき、ビデオ・DVDで日夜研究、練習を繰り返した。そしていつの間にか、選手や指導してくださる方々と真剣に向き

歴史やその活動の話や聞く中で地域防災の要である消防団の大切さを感じたからです。

私が入団してからこれまで、幸いにも地震や風水害、大規模火災などでの現場活動はありません。

もちろん災害時の活動は重要ですが、消防団の活動はそれだけではなく、水防訓練やポンプ操法訓練、救急研修など有事の際に万全に活動出来るように日々の訓練は欠かせません。

春・秋の火災予防週間中の巡回パトロール、年末特別警戒などの予防啓発活動も重要な活動であり、また、平時の活動の中でより地域とのつながりを深く持てることの大切さを感じています。地域とのつながりを深く持つことで、大災害時の情報収集

合っていくうちに、自分から「絶対勝ちたい!」と思えるようになっていた。いつまでたっても自分の納得のいく操法はできず、日々悶々と不安を抱える毎日を過ごしていた。しかし寒い時期から練習を重ね、指導者と選手さらには団員一丸となって取り組んだ結果、地区大会・市大会・西播磨地区大会、そしてついに県大会へと出場することができた。

今回の操法を通して、消防技術の向上のみならず、緊急時の迅速な対応と冷静な判断が必要である消防人としての自覚が芽生え、地域や団、消防本部との連携から、地域・郷土に対する愛着が湧き、自分たちの地域は自分たちで守るといった心構えが醸成された。

消防団は地域にとって安全・安心を守るには必要不可欠な存在である。消防団員としても、地域に頼られる存在になれるよう、これからも防災・防火活動に励んでいきたい。

ワークなど、身に付くまでには時間がかかりそうですが、平成二二年の兵庫県消防操法大会では悔いの残らないようにこれから訓練に励みたいと思っています。

近年は全国的に消防団員の減少が進み、地域密着性という重要な特性も希薄になりがちですが、これまで地域防災の中心を担ってきた偉大な先輩のご指導や助言を受けながら、これから私達「若手消防団員」が地域防災の要として、様々な消防団活動を通じて、伊丹市の防災力の向上のためにさらに消防団を活性化し、地域に密着した信頼される消防団を目指していきたいと考えています。

「団員としての思い」

三木市消防団
福吉分団団員

山本 俊生



私は、昭和四十九年四月に吉川町(平成十七年市町合併により三木市となる)消防団に入団しました。

当時の消防団の体制は、三小隊三六分団総勢五六七人で、常備消防も無く吉川町の防火防災を消防団が一手に担っていました。分団は概ね地区(自治会)単位で組織され、私の所属は団

員八名の小規模分団で、管轄地区は三田市との市境にある十五戸の集落です。地区内には国宝の東光寺があり、貴重な文化財を火災から守るという大切な使命を受けた分団です。

入団当初から、先輩達の後姿を見るたび早く一人前の団員になりたいと、放水訓練などに取組んできました。分団での各役職を歴任し三五年余りが過ぎようとしています。近年の高齢化や若者の田舎離れなどにより、当地区においても若手団員の確保が難しくなっており、現在も一団員として分団長を支え、地域の防人として住民の安全・安心のため日々奮闘しています。

入団したその年の十二月に、最新鋭の可搬式ポンプが配備され、火災発生時には団員所有の

軽トラックにポンプやホースを積み込み現場へ駆けつけておりましたが、平成九年に行政と地域の協力により軽四の積載車が配備され、災害に迅速に対応できるようにになり、団員共々競って災害現場に駆けつけたものです。

私たちの若い頃は、何を思いでも消防団優先と言ったような時代でしたが、最近では社会情勢や生活環境の変化などで、団員としての使命感や連帯感が低下し、組織の弱体化が危惧されつつある状況の中で、先輩団員が長年にわたり築き上げてきた「自分達のまちは自分達で守る」という、郷土愛護の精神を再認識し、地域住民に頼りにされる消防団を目指し、良き後継者づくりに努めてまいりたいと思っています。

消防団今昔

55

「これからの」

垂水消防団

神戸市垂水消防団
舞子分団副分団長

中川 伸一



垂水区内の地勢は、塩屋谷川、福田川、山田川などの谷筋とそとの間に広がる丘陵地で形成されており、ほとんどが住宅地です。かつては、各河川の流域に集落が散在する小村でしたが、戦後、急速に都市化が進み、昭和三〇年に五万人だった人口が、多聞や明舞などのニュータウン開発に伴い四〇年には一〇万人、

五〇年代には二〇万人と急増しました。現在は約二二万人で、神戸市全人口の約十五%を占めています。

垂水消防団は、神戸市の市街地域消防団の中では唯一、全分団が小型動力ポンプ積載車を装備し、現在八分団一六〇名の消防団員が活動していますが、市街地域の消防団は、どうしても災害現場に着くのが消防隊より時間がかり、消防隊の消火作業の支援が主な活動になっていました。そのような状況で、地域住民からも「消防署が有るのに消防団が要るの?」とか「消防団の存在自体知られていない」時期もありました。

しかし、垂水区では、死者九名、負傷者一、〇二〇名、家屋の全・半壊一〇、〇六六棟の甚大な被害を受けた阪神・淡路大

地区通信

「総合訓練」

明石市消防団

平成二〇年十一月十六日(日)午前九時三〇分から、市内の崎小学校で「平成二〇年度総合訓練」を実施しました。

明石市消防団は、団員以下

一、〇四〇名(実員一、〇三七名)・八分団・四九班で組織されていますが、当日は、団員約二七〇名の参加者で訓練を実施しました。

訓練内容は、消防

団員として必要な訓練(号令・命令及び指示)、「隊員の確認」、「横隊の集合」、「年末特別警戒の報告要領」及び「交通安全教育」の予定でありました。



機関員教養訓練

当日はあいにくの雨で、場所を校庭から体育館に移しての訓練実施であったため、手狭で予定をしていた訓練ができませんでした。

まず、訓練に先立っ

て、団長より訓示があり、「地域における最前線の活動機関として、火災はもちろん、風水害等による災害を防止し、地域住民の安全を守ることであり」と任務の認識について訓示がありました。

引き続き、来賓として出席された消防長からは、消防団へのねぎらいの言葉とともに、市民が安全で安心して暮らせるために取り組んでいただきたいと内容の話がありました。

そして、訓練は、メニューを変更して、「第一部 機関員教養訓練」を実施しました。

内容は、明石警察の交通総務係の方に来ていただき、明石市内における「最近の事故状況について」、「飲酒運転による交通事故の発生状況」、「改正道路交通法」並びに今世間を騒がしている「振込詐欺の件」についてお話をいただきました。当日は機関員約七〇名を予定していましたが、雨のため他の訓練場所がなく、全団員が「交通安全」について約一時間の講話を聴きました。

次に、「第二部 各個訓練」そして最後に、年末に市長・市議会議長・消防長・団長が、年末特別警戒をしている団員に対し激励をする。そのときの激励者に対する報告要領についての訓練を実施し、全ての訓練を終了しました。

室内の狭い中、参加団員全員が消防団の使命達成のため、一生懸命訓練に励んでいました。消防団員も一丸となって、災害のない住みよいまちづくりを目指して頑張っています。



各個訓練

わがまちの団長さん

156

「頼もしい団長」

市川町消防団

山下 善弘 団長



市川町は、兵庫県の中央部からやや南西部に位置し、町の中央部を町名の由来となっている清流「市川」が流れる伝統と緑

豊かな町です。

山下団長は、昭和六二年四月に入団以降、持ち前の正義感と熱意で副分団長、分団長を歴任され、平成十六年四月に副団長に、平成二〇年四月には第二七代団長に就任されました。

現在は二七分団、六〇〇名の団員の先頭に立ち、地域の安全・安心と住民の生命・身体・財産を災害から守るため、一生懸命頑張っておられます。

日頃の団長は、規律に厳しい反面、団員への気配りも人一倍細やかで、その人柄は、団員は

もとより団幹部からも厚い信望があります。

そんな団長は、いざ災害が発生すると、いち早く現場に駆けつけ、情報収集をするともに先頭に立って防衛体制を整えるなど、地域住民が安全・安心して暮らせるよう常にリーダーシップを発揮されています。

また、市川町消防団の重点目標である「地域に根ざした消防団」として、地元自治会と合同で消火訓練を行うなど、地域住民と密着し、信頼される消防団を積極的に展開されています。

編集後記

新年明けましておめでとうございませう。

さて、今月号では各団体代表者の年頭のあいさつを掲載しております。また、消防団今昔には三木市消防団福吉分団団員山本俊生さん、神戸市垂水消防団舞子分団副分団長中川伸一さんより寄稿いただきました。厚くお礼申し上げます。

新しい年を迎え、心機一転、改めて消防団活動に取り組んでおられることと思います。本年も「兵庫消防」を「愛読」のほどよろしくお願ひします。